

資料紹介

白江梯川遺跡の琴とかごについて 資料提示と問題提起

久田正弘・中川律子・本田秀生・佐々木由香

1.はじめに

石川県小松市内では多量の木製品が出土する遺跡の調査が多く行われ、石川県埋蔵文化財センターは平成14年度に白江梯川遺跡の調査を行った。弥生時代後期の川跡から多くの木製品と共に、鳥取県青谷上寺地遺跡で製作されたと思われる高杯などが出土した。当センターではその希少性や重要性を鑑み、平成15年「いしかわの遺跡No.15」『石川県埋蔵文化財情報第10号』に写真資料を提示した。その後工楽善通・高垣陽子氏による資料調査により重要な教示を得たので、平成17年『石川県埋蔵文化財情報第14号』で一部の資料紹介を行なった。ようやく平成19年度から遺物整理事業が開始され、木製品の実測や樹種同定作業などを始めたばかりであるが、今回も早期の資料化を行うこととし、琴を中川氏に、かごを本田・佐々木氏に資料提示と問題提起をお願いした。また放送大学の笠原潔教授には博士論文の提供や原稿指導を受けており、感謝しております。(久田・中川)

2.概要

白江梯川遺跡は小松市白江町の北西側に位置し、発掘調査は河川改修事業に係わる堤防設置部分であり、現在の梯川の左岸にあたる(第1図)。当時の川跡は大きく蛇行しており、川幅は60m以上で、弥生後期前半～後半の土器を主体に、中期末と後期末の土器が若干出土した。木製品は東岸の肩部において、何層も自然堆積の状態で出土した。取上げ層位は大きく4層に分かれており、琴は最上層(-0.03m)から舟部材や建築部材などと出土(写真1～3)し、かごは最下層(-1.05m)から壊れた面を上にして出土(写真4)した。(久田)



写真1 木製品検出状況



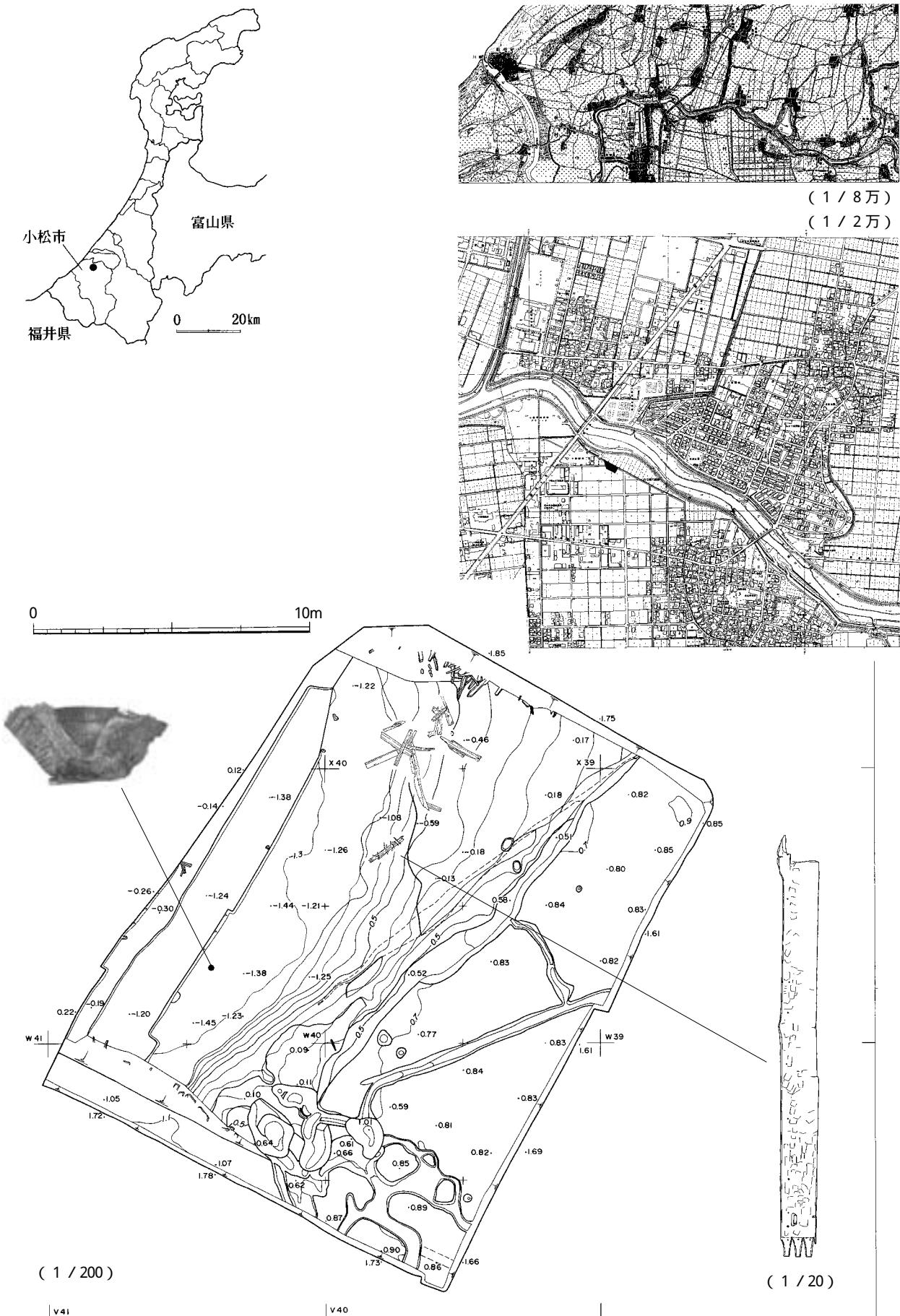
写真2 琴出土状況



写真3 琴全景



写真4 かご出土状況



第1図 遺跡の位置と琴出土状況

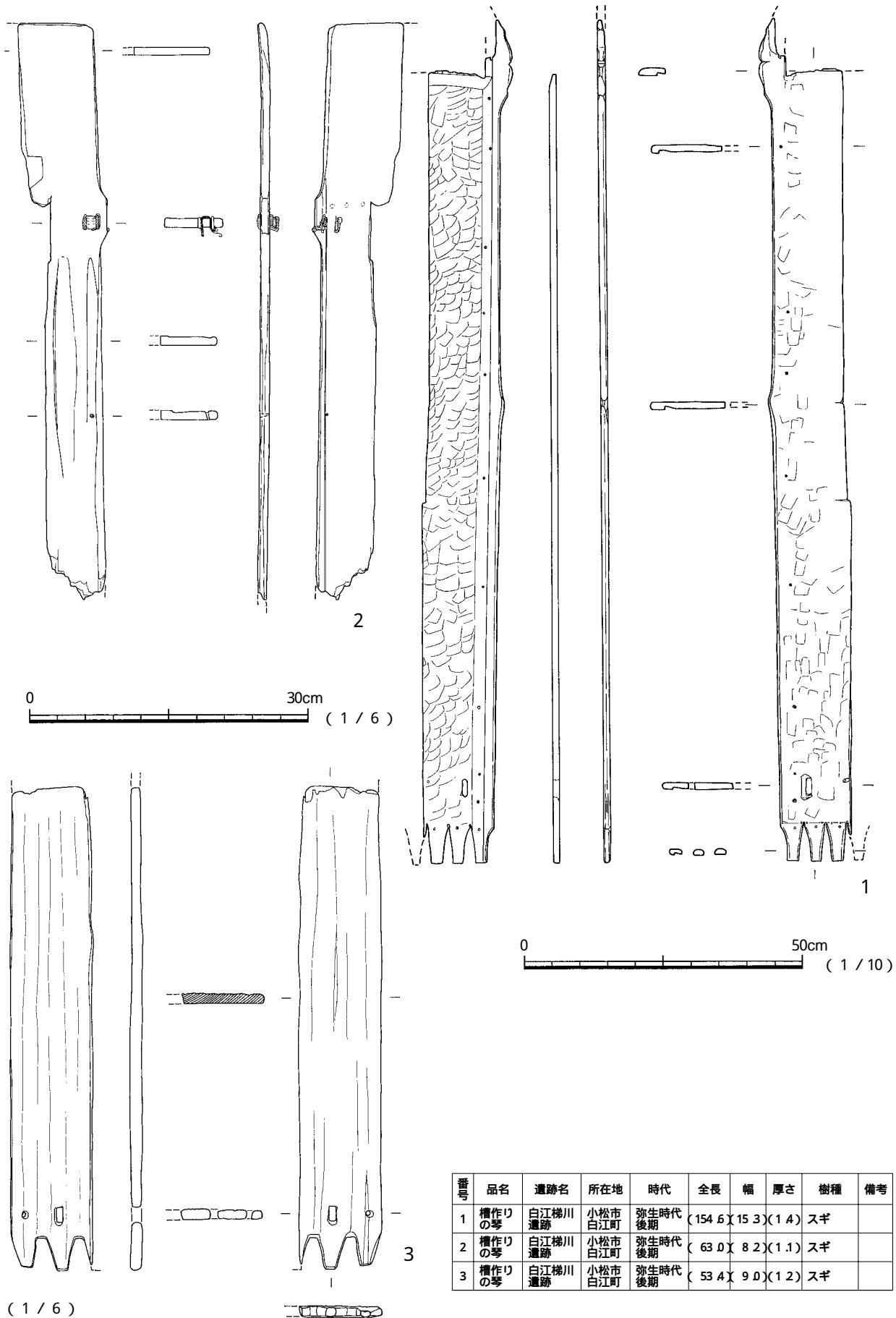
3. 出土琴について

白江梯川遺跡からの出土品のうち、確実に琴といえるものは3点ある（第2図1～3）。いずれも弥生時代後期の川跡から多量の木製品とともに出土した。周辺の遺跡から出土した琴との比較検討を交えながら問題提起していくこととする。なお、本稿を執筆するにあたり、放送大学の笠原潔教授に原稿を読んでいただき指導していただいた。それらを今回の資料検討や考察にも反映している。

第2図1は槽作りの琴の上板である。響孔に沿って縦方向（木目方向）に約半分に折れ、琴頭の一部も破損している。本来の大きさは、全長は約160cm、幅25～27cmほどの大型の琴であったと推測される。材はスギの追柾目材で木目幅は広い。全体の形状は琴頭から琴尾までほぼ同一幅で推移し、概ね長方形をなすが、胴部中央側縁の一部に僅かに張り出した部分がある（写真5）。器体の表面は滑らかに磨かれているのに対し、裏面はほぼ全面に手斧痕がある。共鳴槽を装着する部分は斜めに切り込まれた溝状になっており、そこに磯板（槽の側板）をはめ込んでいたと思われる。磯板は木釘で固定され、右側面寄りに10箇所の木釘孔と木釘の残存が確認できる。琴尾側の小口板の装着痕は確認できなかった。

琴頭側は、側縁が雲のように波打つという、これまで出土した琴には見られない特異な形状を持つ（写真8）。残念ながら一部が欠損しているため、琴頭部全体の形状は把握できない。集弦孔は無く、弦は琴頭端部に残る突起に固定されていたと考えられる（注1）。胴部中央には他の琴には見られない形状の響孔（サウンドホール）がある。響孔はちょうどアルファベットの「I」の字のような形をしてスリット状に切り込まれていたと思われる（写真7）。琴尾には4本の突起が現存している。このうちの3本は完存しているが、残る1本は本体が縦に折れた結果、破損している。突起は板の表面に設計線を引いた後、その線に沿って小孔を穿ち、それを目印に削り出している（写真6）。本来の突起数は、響孔がスリット状で中心線上にあったと考えれば6突起であるが、響孔の幅が広ければ7突起であったことも考えられる。各突起の根元には弦を通した貫通孔がある。突起からわずかに離れたところに、長さ3.2cm、幅0.5cmの長方形の孔が貫通している（写真6）。孔の縁にはさらに浅く切り込まれた部分があり、上部から別材をはめ込む構造になっている。すぐ脇に小孔があることから、別材ははめ込まれた後、この孔を利用して固定されていたことも考えられる。しかしこうした別材部品をはめ込むための孔は、白江梯川遺跡出土のもう1点の琴（第2図3）以外には他に類例を見ないもので、何の目的で使われたかは不明である。琴中央部の割れ目には補修孔がある。本体に亀裂が入ったか折れたために補修したと考えられる。これは、琴が補修後もしばらくの間、使用されていたことを示すものである。

第2図2・3も槽作りの琴の上板である。2は琴頭と集弦孔、側縁の一部が残る断片で、木目幅の細かいスギの板目材である。琴の胴部は直線的に伸びているが、集弦孔付近で側面が外側に張り出している。その後、琴頭に向かって僅かに幅が狭くなっていく。琴板中央寄りの折損箇所には集弦孔の一部が残る。集弦孔の形状は不明であるが、集弦孔の琴尾寄りの部分には浅く段状に彫り込まれた窪みがある。弦固定用のものか、装飾的なものか定かではないが、別部材をはめ込んでいた可能性もある。琴板表面は成形後に磨かれている。裏面は風化が進んで手斧痕は見えない。磯板の当たった痕跡や溝の掘り込みなどは無い。共鳴槽の装着には木釘留めと樺巻き・楔留めの双方を併用している。側面の膨らんだ部分では、琴の上板と槽の磯板とを樺巻きして固定した後、隙間を楔で充填する固定法が取られているが、そこから20cmほど離れた場所には直径0.3cm程の木釘が一箇所残存している。樺巻き・楔留め用の孔の間隔から、磯板の厚さは0.9～1.0cmほどであったと思われる。集弦孔の位置から推定すると、本来は琴頭側で幅15～16cm、琴尾側で幅20cm程の琴だったであろう。



第2図 石川県小松市白江梯川遺跡出土琴

3は琴尾側の断片で、突起が3本残る。スギの追柾目材で木目幅は細かい。側面は直線状である。琴尾突起の付け根に木釘孔が貫通していることから、槽の磯板は木釘で固定されていたであろう。琴板表面は風化が著しく成形痕は認められない。一方の面は明らかに丸みを持たせてあり、こちらが表面であると判断できる。これに対して、裏面は平坦で、手斧痕などは見えない。端から二番目の突起根元に 1.9×1.1 cmの長方形孔が貫通している。これに類した孔は第2図1の琴もあるが、孔の用途は不明である。

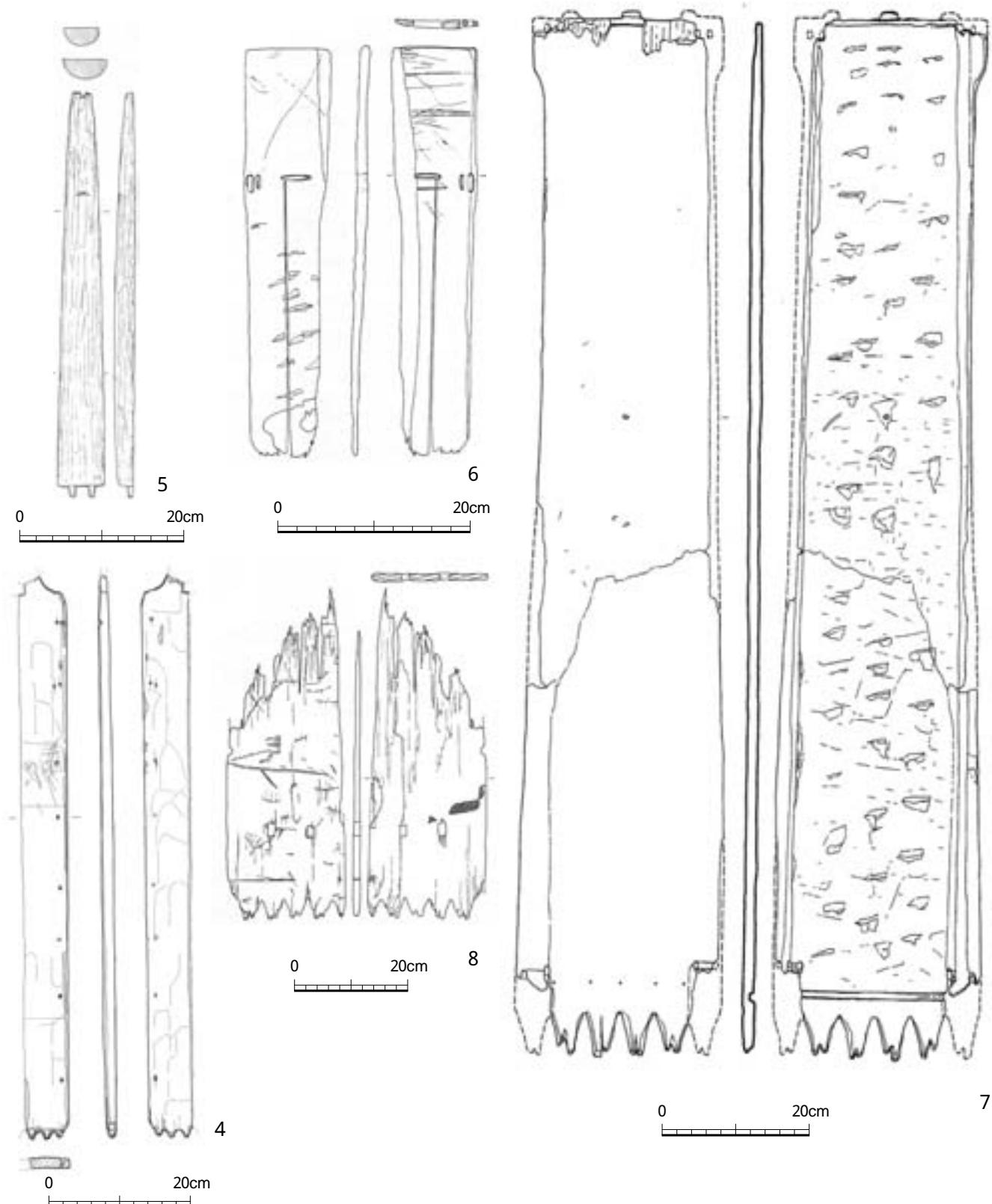
石川県内遺跡の出土例

今回、白江梯川遺跡の琴を資料紹介するにあたり、周辺の遺跡から出土した琴資料の調査も行った。これまでに、同じ小松市内の八日市地方遺跡から槽作りの琴が1点、金沢市の西念・南新保遺跡から2点の槽作りの琴と筑状弦楽器が1点、同市薬師堂遺跡でも槽作りの琴が1点出土した。その他、河北郡津幡町加茂遺跡でも琴が1点出土していることが新たに判った。

小松市八日市地方遺跡(橋本ほか2003)の槽作りの琴の上板(第3図4)は、弥生時代中期後半(IV期)のもので、石川県内では最も古い時期の琴である。残存長78.2cmのやや小型の琴で、木目に沿って縦にほぼ半分に折れている。側縁は直線的に伸びるが、琴頭部の集弦孔の脇で急に幅を減じるよう、削り込まれている。琴頭部が欠損しているため、琴頭の形態は不明である。琴尾突起は3本残り、突起付け根には設計線が引かれている。共鳴槽固定用の木釘が8箇所に観察される。上板表面には舟の線刻画がある。舟はゴンドラ型で櫂が描かれている。琴頭部に残る集弦孔が琴板中心線上にあったとすると、本来は幅12~13cm程で6突起を有する琴であったと推定できる。

金沢市西念・南新保遺跡では昭和59・60年度調査で筑状弦楽器(第3図5)と槽作りの琴の上板(第3図6)が各1点出土した(楠ほか1989)。その後、昭和62年度調査で大型の槽作りの琴の上板(第3図7)が1点出土した(楠ほか1992)。第3図5は、報告書では「琴状木製品」と掲載されているが、「筑状弦楽器」と呼ばれる弥生・古墳時代の弦楽器である。筑状弦楽器としては、奈良県橿原市四分遺跡(藤原京下層)や静岡県浜松市角江遺跡からの出土例と並ぶ、古い時期に属する資料である。6cm幅から徐々に細くなる棒状を呈し、断面が半月形の典型的な筑状弦楽器の形状を持つ。頭部は集弦孔部分で欠損している。集弦孔の切り込みは底面から入る。尾部には2突起が現存するが、同列上面に突起痕があることから、本来は5突起であったと推定される(写真10)。器体表面の琴尾寄りの部分では、無数の細かい傷痕が2ヶ所に集中している。現段階ではこれが演奏時の接触による使用痕であるのか、腐食によるものかは判断できない。この製品には古墳時代の筑状弦楽器に見られるような突起下部の抉り込みは無い。第3図6は槽作りの琴の上板の琴頭側の断片である(注2)。本来は全長120cmを超える大型の琴の上板であったと思われる。側面の一部に膨らみを持つ点で、白江梯川遺跡の琴頭破片(第2図2)と良く似た形態を示す。この膨らみ部分のすぐ横には、槽固定用の結縛孔と集弦孔が並んでいる。側面には木釘孔もあることから、木釘留めと樺巻きの双方を併用していたことが分かる。集弦孔は横長のスリット状に開き、その琴尾寄りの部分は方形に浅く彫り込まれている。この部分には別材部品がはめ込まれ、木釘で固定されていたようで、小孔が3箇所にある(写真9)。この別材部品は、強く張った弦が集弦孔の縁に喰い込むのを防ぐためのものであろう(注3)。琴頭側の表面と裏面には線刻がある。また琴央裏面には手斧ではついた痕跡が連続して刻まれている。堰材に転用した状態で見つかっている。

薬師堂遺跡の琴(第3図8)は平成15年度の発掘調査で見つかった(出越ほか2006)。槽作りの琴の上板の琴尾側の断片で、琴央付近で折れている。針葉樹の木目幅が細かい板目材から作られている。琴尾突起寄りの側縁に、一箇所木釘孔が残る。突起は最側端のものは中央4突起の半分の形状である。



番号	品名	遺跡名	所在地	時代	全長	幅	厚さ	樹種	備考
4	檜作りの琴	八日市地方遺跡	小松市日の出町	弥生時代中期後半	(78.2)	(6.5)		スギ	舟の線刻あり
5	筑状弦楽器	西念・南新保遺跡	金沢市西念町・南新保町	弥生時代後期	(50.2)	(6.6)	5.2	針葉樹柾目材	5突起
6	檜作りの琴	西念・南新保遺跡	金沢市西念町・南新保町	弥生時代後期	(62.4)	(13.2)	1.8	針葉樹追柾目材	
7	檜作りの琴	西念・南新保遺跡	金沢市西念町・南新保町	弥生時代後期	139.4	28.0	1.9	スギ	
8	檜作りの琴	薬師堂遺跡	金沢市薬師堂町	弥生時代後期～終末期	(40.2)	(20.7)	(1.15)	針葉樹柾目材	

第3図 石川県内の出土琴



写真5 琴(第2図1)側縁部の張り出し



写真6 琴尾側の補修孔と方形孔

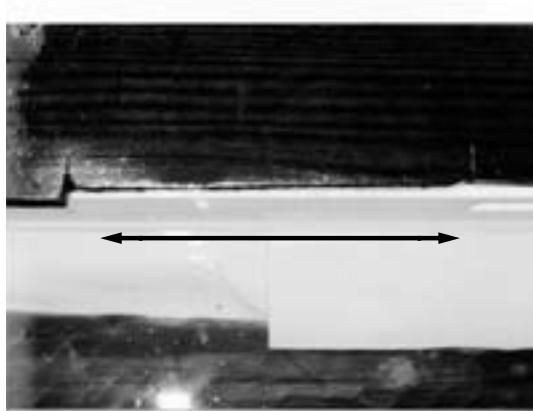


写真7 琴央の響孔(サウンドホール)



写真8 琴頭側側縁の装飾



写真9 集弦孔と別部材装着箇所



写真10 琴尾側の突起欠損状況

写真5～8 白江梯川遺跡の槽作りの琴(第2図1)
写真9 西念・南新保遺跡槽作りの琴(第3図6)
写真10 西念・南新保遺跡筑状弦楽器(第3図5)

が、全部で6突起であったと思われる。中央の4突起頂は、西念・南新保遺跡の琴（第3図7）と同じように、頂部に切り込みが入っている。板面中央には $19 \times 13\text{cm}$ と $25 \times 13\text{cm}$ の二つの長方形の孔が並んで穿たれている。共鳴槽の小口板固定用の孔にしては琴央側に寄り過ぎており、何のための孔か、用途は不明である。裏面に磯板や小口板の当たった痕跡は無く、設計線も見られなかった。ただ裏面には虫食いの痕や一部炭化したところがある。

考 察

以上、白江梯川遺跡から出土した琴を資料紹介するとともに、石川県内の遺跡から出土した琴の調査結果をまとめた。次にこれらの琴を比較検討することによって見えてきた特徴や類似性など考察を交えて見ていくこととする。

形状の特徴 白江梯川遺跡の槽作りの琴（第2図1）は、基本的な構造はこれまでに出土した他の琴と同じであるが、部分的には特異な形状を示す。特に雲のように弧を描く琴頭部側縁の形状や、1字形の響孔の形状は、他に類を見ない（写真8・7）。また、側縁の一部が外に張り出す形状（写真5）は、同じ白江梯川遺跡から出土した琴頭破片（第2図2）や西念・南新保遺跡の琴頭片（第3図6）にも見られる。この地域の琴特有の形態といえよう。

上板裏面（共鳴側）の手斧痕 今回調査した資料のうち、白江梯川遺跡出土の1点と、西念・南新保遺跡出土の2点の琴の上板裏面には、手斧痕が見られた。同様の手斧痕は、新潟県刈羽村西谷遺跡出土の琴にも見られる。こうした手斧痕は、共鳴槽を装着する琴にしばしば見られるものである。一説には音響効果を高めるために意図的に施したものといわれるが、西念・南新保遺跡の2点の琴に見られるような、手斧の刃を立てて粗い傷を連続して付けている例はほかにあまり見ない。

集弦方法 白江梯川遺跡の槽作りの琴（第2図1）は、西念・南新保遺跡の槽作りの琴（第3図7）と同じく、琴頭端に削り出された突起に弦を固定したと思われる。類似の弦固定法は、新潟県刈羽村の西谷遺跡出土琴にも見られる。出土地は離れているが、この時期、こうした琴製作上の「規範」が働いていたことが考えられる。また、西念・南新保遺跡の琴頭片（第3図6）は、集弦孔の手前に別部材を埋め込むための窪みが掘り込まれており、別部材が木釘で固定されていた痕跡がある。同様の掘り込みは、白江梯川遺跡の琴頭破片（第2図2）にも見られる。このように集弦孔の手前を浅く掘り込み、弦受け用の別材を埋め込む例は、これまで弥生時代後期末～古墳時代初頭ないしは古墳時代中期の近畿圏の例が知られていたが、今回、それに先立つ弥生時代後期に北陸地方でも既にこうした手法が取られていたことが明らかとなった。

共鳴槽の装着方法 金沢市西念・南新保遺跡の琴（第3図6）では、琴の上板と共鳴槽とを固定するのに、木釘留めと樺皮留め二種類の方法が併用されていた。西念・南新保遺跡から出土したもう1点の琴（第3図7）も同様であった。この手法は、白江梯川遺跡の琴頭破片（第2図2）でも取られている。この点は、この地域の琴の特徴の一つといえよう。木釘留めと樺巻きを併用する方法は、滋賀県の琵琶湖周辺（近江）の遺跡から出土する琴にも見られる。ただし、この装着法が近江の影響を受けたと考えるには更なる検討が必要であろう。時期的には石川県内の琴のほうが古いため、近江のほうが北陸の琴の影響を受けたことも考えられる。さらにいうならば、この種の装着方法については、二つの文化間の交流によるものとだけ考えるよりも、もっと広い文化圏で考える必要があるかもしれない。

転用 西念・南新保遺跡の琴頭片（第3図6）は「堰材」へ転用されていた。類似の例としては、大阪府の龜井・城山遺跡出土の琴の上板（古墳時代中期）が堤補強用の杭列の横材に転用されていた例がある。

琴上板に残る方形孔 白江梯川遺跡出土の2点の琴（第2図1・3）は、上板の琴尾寄りの部分に、何かをはめ込むためのものであることを思わせる方形孔を持っている。同様の方形孔は、薬師堂遺跡出土の琴の上板にも二ヶ所ある。これらの孔、もしくはそこにはめ込まれた部材の意味は分からない。孔は、琴廃棄後、板を別な用途に転用した際に開けたことも考えられるが、弦を支えるための何か駒（ブリッジ）のようなものを立てるために開けたことも考えられる。後者であれば、北陸の琴の特徴といえよう。

破損の問題 西念・南新保遺跡の大型琴（第3図7）は、木目に直行するように、板中央で真二つに折れている。広義に見れば、白江梯川遺跡の琴（第2図2・3）や西念・南新保遺跡の琴（第3図6）薬師堂遺跡の琴（第3図8）も胴央部で折れた例の部類に入るであろう。多くの出土琴が木目に沿って縦方向に折損しているのは自然であるが、他地域でも木目に直行するように琴央部分で折れている例が幾つか確認されている。これらの琴は不要になった時点で意図的に折られた可能性がある。琴が再び楽器として機能出来なくなるように、意図的な廃棄の仕方をしたのではなかろうか。

おわりに

石川県内では低湿地の遺跡調査例が増え、出土木製品の点数は近年飛躍的に増えており、出土琴もそれに伴い県内の出土例が一気に増えることとなった。今後も出土例は増えていくことが予測される。今回石川県内の琴の出土例を調査した結果、この地域独特の形状や構造上の特徴が明らかとなつた。本稿は限られた地域の琴の検討に限定したが、今後は、他地域の出土琴との比較や琴製作上の交流関係の有無など、より広域の視点から見ていく必要がある。これから資料整理と報告書作成に向けてさらに検討を重ねたい。末筆にあたり、助言をいただいた笠原潔教授（放送大学）資料調査にご協力いただいた久田正弘・大西顕氏（石川県埋蔵文化財センター）楠正勝氏（金沢市埋蔵文化財センター）に感謝申し上げる。（中川）

注1 笠原潔は「西念・南新保遺跡出土の『槽作り』琴の琴板のうちの1点は、集弦孔を持っておらず、代わりに琴頭端に三つの台形状の『山』を切り出している。琴尾突起から張られた弦は、この三つの山の間の窪みに二手に分かれて導かれ、その後、何らかの仕方で琴頭部に結わえて固定されたものと思われる。」と推察している。

注2 『考古資料大観』に「122-7 線刻板（左：部分）長62.4cm 弥生時代後期～末（2～3世紀）石川県金沢市西念・南新保遺跡（金沢市教育委員会）」として掲載されている。資料実見の結果、琴と判明した。

注3 集弦孔の手前にこのような別材を埋め込む例は大阪府堺市下田遺跡や滋賀県守山市下長遺跡の槽作りの琴に見られ、兵庫県神戸市の玉津田中遺跡では弦受け用の別部材が単独で出土している。同じような弦受け用の部材を筑状弦楽器にはめ込んだ例は、大阪府茨木市溝呂遺跡、京都府向日市東土川西遺跡、滋賀県守山市古高・経田遺跡出土の筑状弦楽器に見られる。

参考文献

- 伊藤律子 2004 「筑状弦楽器 木製と土製の比較による形態の特徴」『静岡県考古学研究36』 静岡県考古学会
笠原 潔 2004 『埋もれた楽器 音楽考古学の現場からー』春秋社
笠原 潔 2005 『出土琴と筑状弦楽器の研究』大阪芸術大学大学院芸術研究科平成17年度学位（博士）申請論文
楠 正勝ほか 1989 『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ（金沢市文化財紀要77）』金沢市教育委員会
楠 正勝ほか 1992 『金沢市西念・南新保遺跡Ⅲ（金沢市文化財紀要99）』金沢市教育委員会
出越茂和ほか 2006 『薬師堂遺跡Ⅰ（金沢市文化財紀要229）』金沢市埋蔵文化財センター
橋本正博ほか 2003 『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会
山田昌久編 2003 『考古資料大観8 弥生・古墳時代木・繊維製品』小学館

4. かごの形状・素材・製作技術

遺跡から出土する編組製品は、全体の形状が不明なものが多くの、また編組技法を部位ごとに観察可能な遺物は非常に少ないが、白江梯川遺跡から全体の形状が保存されていて製作技術の推定が可能なかごが出土した。供伴する土器型式から弥生時代後期と想定される。ここではかごの形状の観察と素材の部位別の同定を行い、製作技術について検討する。

カゴの状態 かごは、底部の対角線上、底部側上方から圧力を受けて潰れた状態で出土した(写真4)。クリーニングとポリエチレングリコール(PEG)による含浸・保存処理の後、シリコン型をベースとした展示台が製作され、残りの良い面を上にした状態(出土状態とは表裏が逆の状態)で石川県埋蔵文化財センターにおいて保管されている(写真11)。表面側を見ると、右側縁は裏面に連続しているものの、左側縁は欠損し裏面側には連続せず、また、巻縁部分が失われている。裏面側は、底部角から体部がV字状に欠落するとともに、右側体部は底部と分離した状態にある。現状で幅29.5cm、高さ14cm、最大厚4.5cm、内部には一部堆積物が残った状態である。

形 状 本来の形状は変形や欠損のため正確には復元できないが、底部は一辺約10cmの正方形、体部は上方に開き、本体の器高は約12cm、口縁は径約25cmの円形を呈すると考えられる。かごは、底部を網代組み、体部を飛びござ目組み、ござ目組み、ヨコ添え捩り組みで組み、口縁は巻縁で仕上げている。鳥取県青谷上寺地遺跡の出土品を基にした分類の、I A 1類にあたる(野田ほか2005)。『日本原始織維工芸史 原始編』では籠型土器として、同様な形態のかごを型として製作された籠圧痕土器が紹介されている(杉山1942)。

底部の一辺には、幅0.8cm、厚さ1cm、長さ9.7cmの脚台が取り付けられている。一端は1cm程、もう一端は2cm程先端から入った部分に切欠きを設け、ここに組みひごと同じ材を巻きつけて底部の端付近に取り付けている。相対する脚台は失われている。青谷上寺地遺跡では、かごの上面から同様の部材が出土しており、類似したものとして底部を木材で補強するかごの民俗例が紹介されている(野田ほか2005)。

素 材 ひごの樹種は、針葉樹のアスナロである。保存処理後、保管中に落ちた破片と、本体のタテ材、ヨコ材、ヨコ添え捩り組み巻き材それぞれ2ヵ所から試料を採取して、横断面(木口と同義)接線断面(板目)放射断面(柾目)の徒手切片を作製してプレパラートにのせ、光学顕微鏡下で木材組織の同定をおこなった。その結果、これらはすべてアスナロであった(写真15)。アスナロはヒノキ科アスナロ属の常緑針葉樹で、やや軽軟な材であるが水湿に強い材である。ひごの切片はガムクローラルで封入し、永久プレパラートとして、石川県埋蔵文化財センターで保管されている。

ひごの年輪数は3~5年輪程度で、木取りはすべて板目である。ひごの表面に小枝の残る節や段差が確認できることから、直径2~4cm程度の枝、あるいは小径木をへいでひごを製作していることが推定される。白江梯川遺跡と同様の形態や製作技法をもつ青谷上寺地遺跡のかごの素材はほとんどがマタタビであり、形状や製作技法は類似していても用いられる樹種に差異が見られた(野田ほか2005)。

タテ材は、幅2~5mm、厚さ1mm以下で、ヨコ材に比べやや厚い。長さは36cm以上、節のある材がやや目立つ。ヨコ材は、幅1~3mm、厚さ1mm以下で、長さはひごの重ね部分から想定すると、短いもので40cm程と思われる。タテ材に比べ幅の狭いひごが使用される。また、体部中央のヨコ材はヨコ材の中でもやや細いひごが使用されている。小枝や節は、ほとんど確認できない。こうしたことから、みかん割りのアスナロ材を調整し、板目にひごをへぎ、樹皮側の幅広の部分をタテ材に、樹芯側の幅狭の部分をヨコ材に使用したとも考えられる。

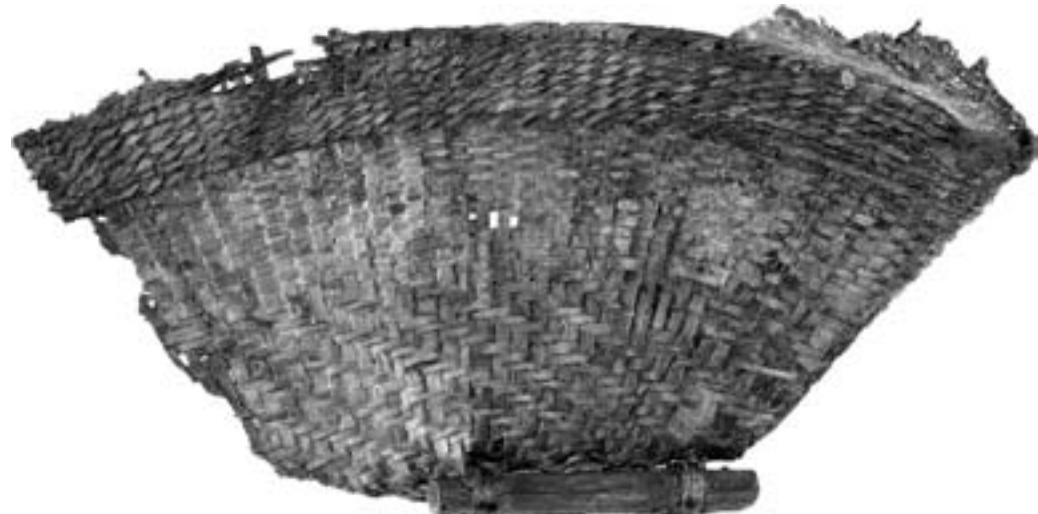


表 面



裏 面

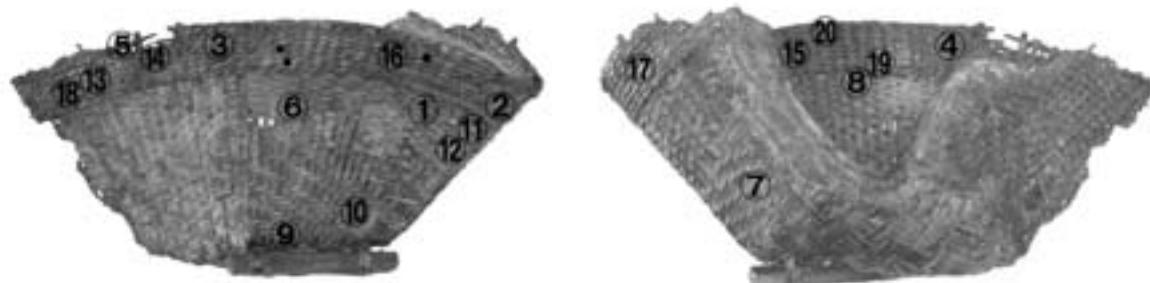
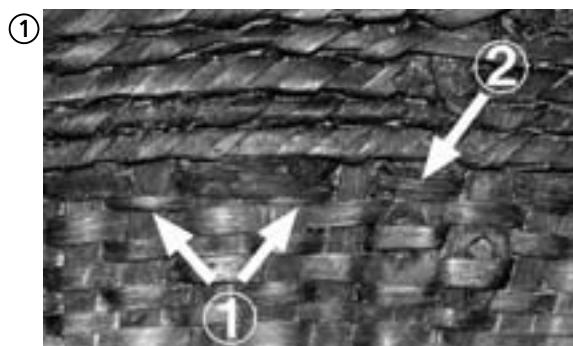


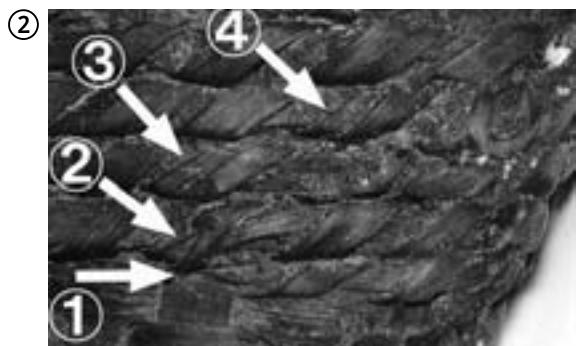
写真11 かごの状態（上・中）と細部写真の位置（下）

ヨコ添え捩り組みの巻き材は幅2mm前後、厚さ1mm以下、ヨコ材と同じかやや薄いひごが用いられている。縁巻き材は幅4mm前後、節の有無を除けばタテ材とよく似ている。ヨコ添え捩り組みの巻き材は、頻繁に継ぎ足しが行われているが、縁巻き材では確認できなかった。

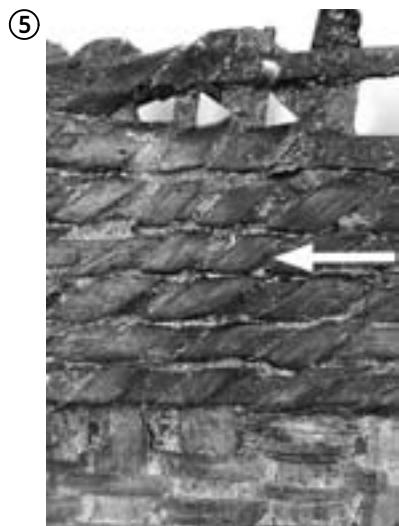
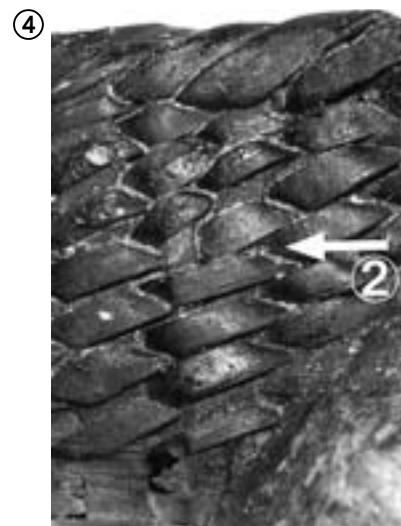
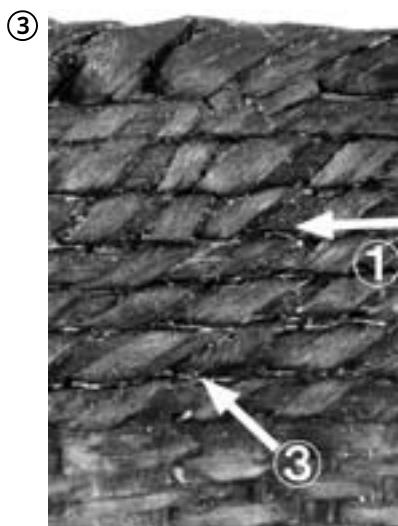
全体的に幅の狭い薄いひごを用いており華奢で繊細なつくりである。タテ材にはやや幅が広く若干



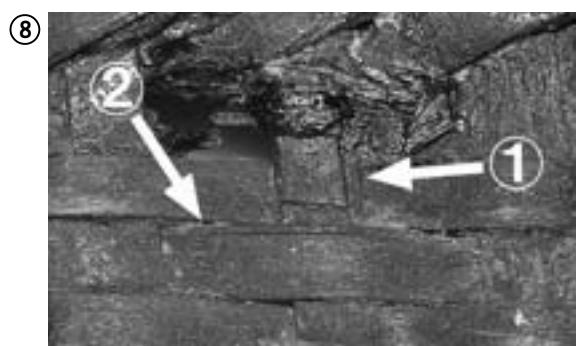
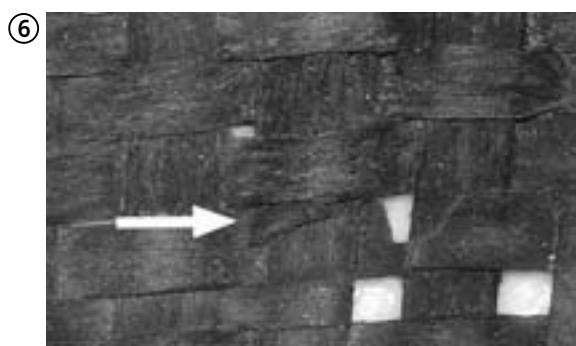
で見えているヨコ材が②の位置では見えなくなる。巻き上げの終わり。また、およびその右隣のタテ材には節が確認できる。



①の位置からヨコ添え掠り組みが始まっている。②、③、④は重ねられた掠り組み材が確認できる。



③では②の位置から掠り組みが増えている。④は、その裏面で①の位置で掠り組みが増える。巻き材の位置が少しずれている。隙間からタテ材が二股に分かれ、ひごを増やしていることが確認できる。また、③ - ⑤で掠り組材の重ねを確認した。⑥は、別の増し材の状況。矢印の地点で掠り組みが増えている。



⑥は表面、⑦は裏面である。⑥では矢印の位置で、重ねられたタテ材の端が見える。
⑦では②の位置で重ねられたタテ材の端が見える。また、⑧ではヨコ材が重ねられていることがわかる。

写真12 かごの細部 1

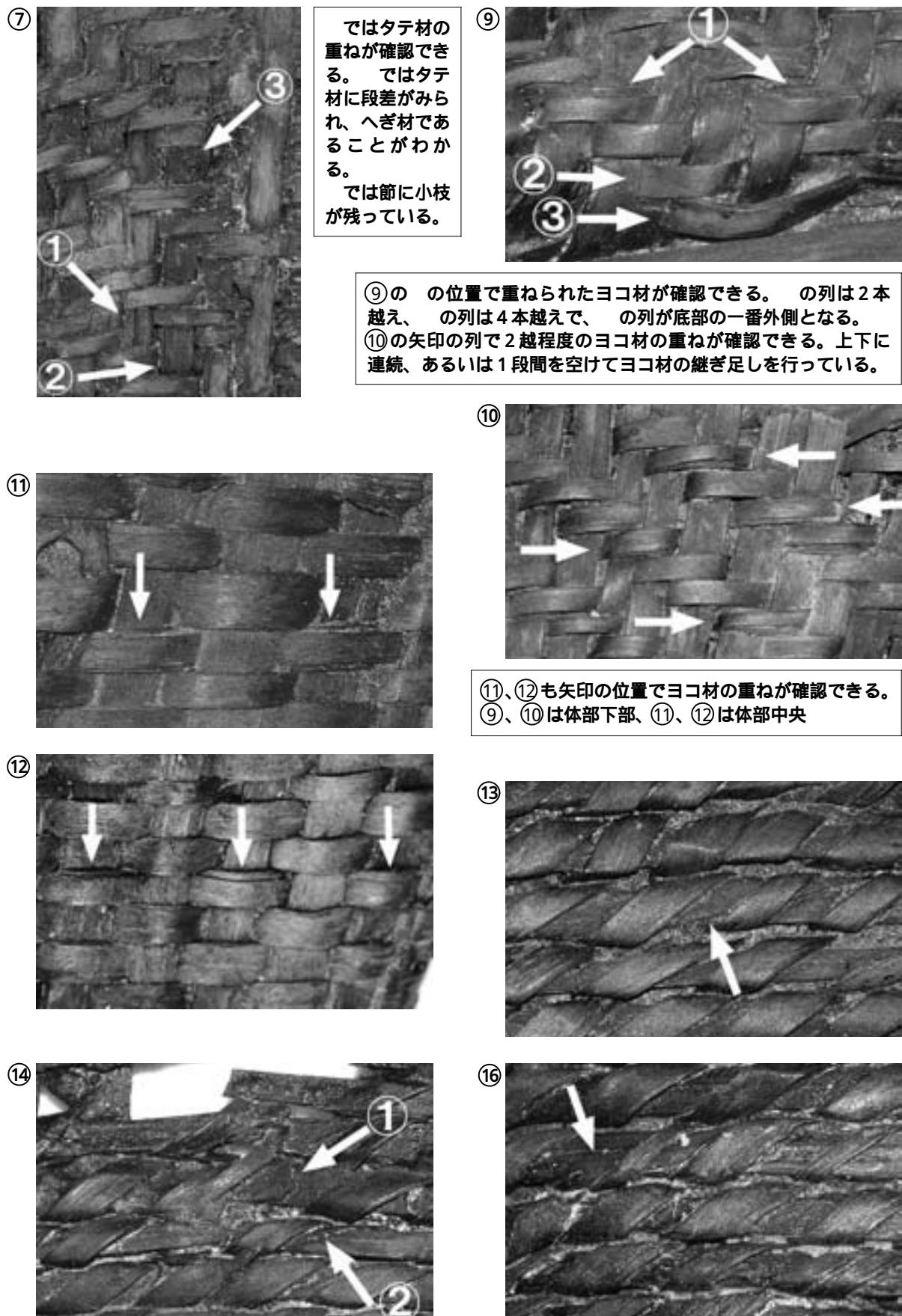
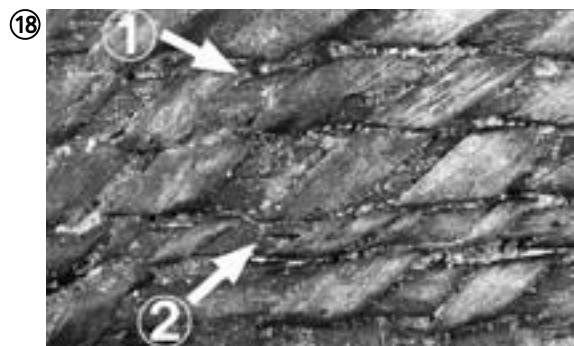
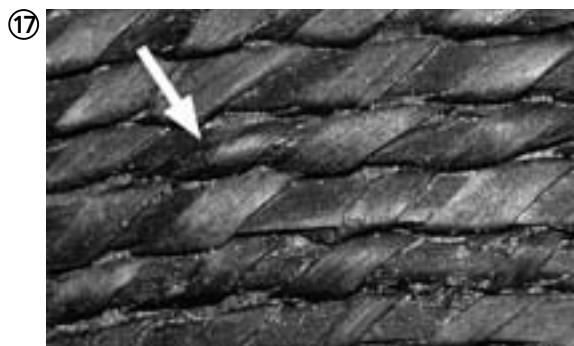


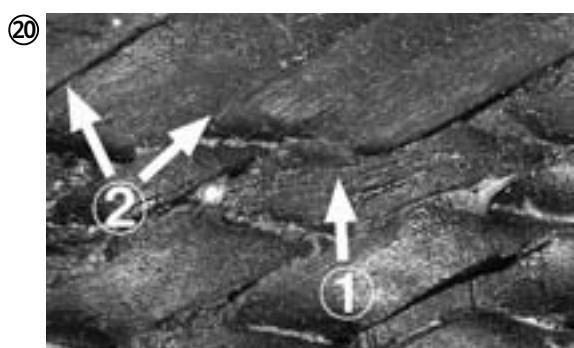
写真13 かごの細部 2



⑬、⑭、⑯～⑰は、外面で確認できたヨコ添え掠り組みの材を重ねた部分である。他に の位置でも重ねを確認した。すでに巻かれた巻き材2～3巻きの下に斜めに走る材が確認できる部分と、二重に材が巻かれる部分が確認できる。⑭の 、⑰の ではヨコ材を重ねている。材の重ね方が異なっている。



⑮、⑯は、内面で確認できた巻き材を重ねた部分である。
⑮は二重に巻かれた部分であるが、 は材が逆方向に折
り返されている。
⑯は、本来の巻き材の上に逆方向に走る材が確認できる。



はヨコ材の端とも考えられるが判然としない。 は
縁巻き材であるが、中央が両側の下になっている。2
本飛びで巻いていることがうかがえる。
材の重ねはまだまだ見落としがあると思われる。

脚台は、底部端の材に縦材と同様な幅の材を3回共巻
きし取り付けている。巻き材の端は巻いた材の間に差
込み止めている。脚台端部はやや丸みを持たせている
様に見える。



写真14 かごの細部 3

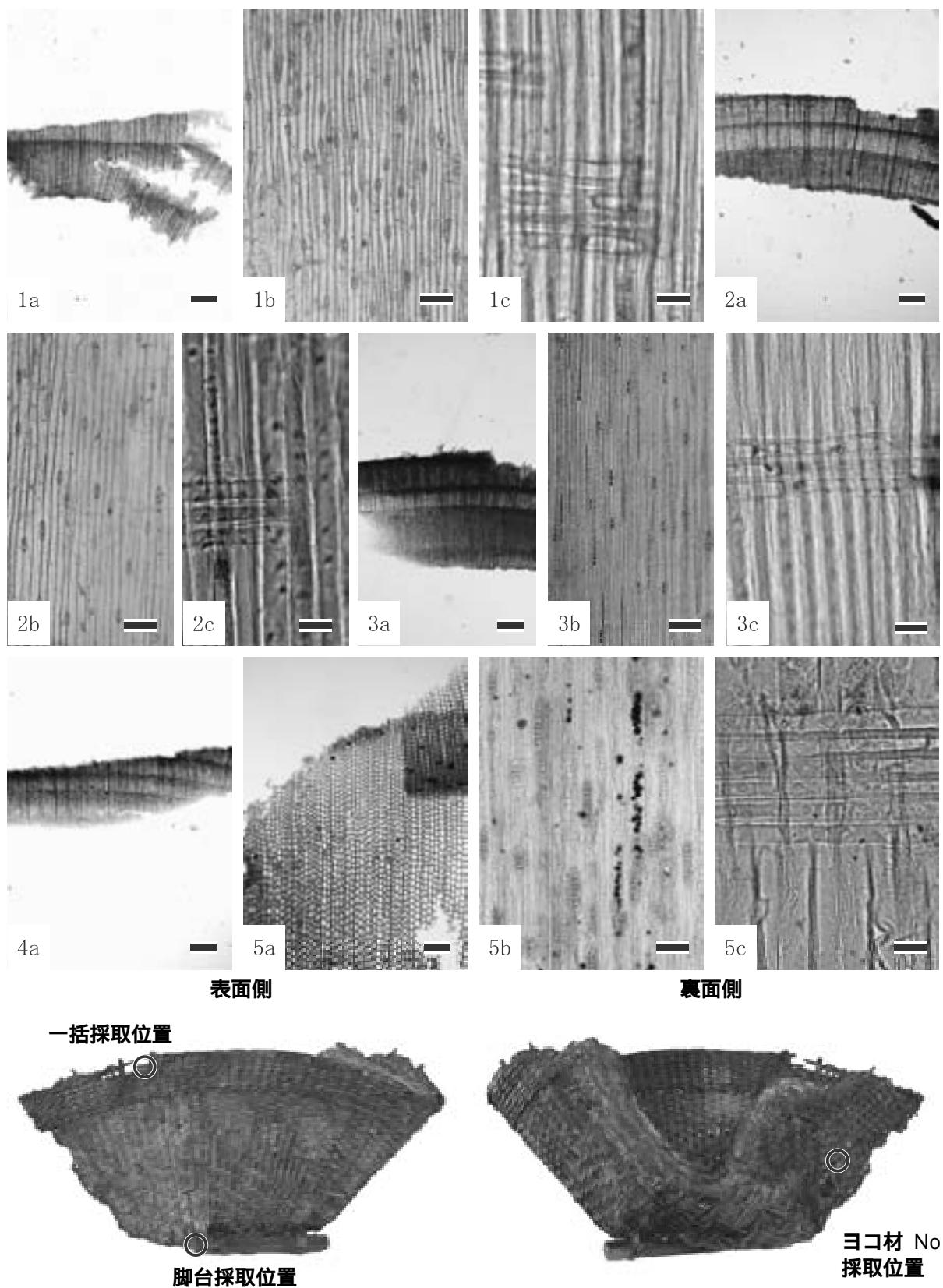


写真15 白江梯川遺跡出土編組製品の素材の光学顕微鏡写真

1a - 1c : アスナロ(タテ材一括), 2a - 2c : アスナロ(ヨコ材一括), 3a - 3c : アスナロ(ヨコ添え捩り組みの巻き材一括材), 4a : アスナロ(ヨコ材, No.1925), 5a - 5c : スギ(脚台, No.1928). a : 横断面(スケール = 200μm), b : 接線断面(スケール = 100μm), c : 放射断面(スケール = 25μm).

厚めのものを、ヨコ材や巻き材には幅の狭いものが使用されており、ござ目組み通有の使い分けがなされている。

ひごの長さは判断できなかったが、体部上部で頻繁な巻き材の継ぎ足しが確認されるのに対し、中央部と下部ではそれほどでもないことから、ある程度決まった長さのひごが使用されていると思われる。一方で、一定の長さのひごを継ぎ足したとは考えにくい部分もあり、臨機応変にひごを使用していると考えられる。

また、脚台は針葉樹のスギであった。木取りは芯なしの角材である。スギは木理が通直で、割裂性と加工性のよい材である。白江梯川遺跡で同時期の木製品にはスギが多用されており（未報告）、身近に資源が豊富で、板や角材を作りやすいスギが用いられたことが推定される。

製作技術 かごの底部はひごを2本一組とし、2本越え2本潜り1本送りの網代組みで組まれる。確認できるところで1辺22本11組が数えられ、さらに一番外側にひご1本を、4本越え4本潜りで組んでいる。タテ材は立ち上げ時で総数96本あるいは97本と考えられるが、ヨコ材の始まりや組み調整された部分は確認できず、どちらか判断できなかった。

体部は巻き上げで組まれる。下部は22段目まで、2本越え2本潜り1本送りの飛びござ目組みで組まれる。ヨコ材の重なりが何カ所かで確認でき、ひごを足していることがわかる。中央は、1本越え1本潜り1本送りのござ目組みで15段組まれる。ヨコ材の重なりは見つけられなかつたが、巻き終わりを確認している。上部との境には別の素材が横方向に1周入れられているが、素材が非常に薄くて脆いため、同定できなかつた。ひごに比べ薄く柔軟で、保存処理後の色調は黒みを帯び、表面には横方向の筋状の起伏が確認できることから、アスナロではない可能性が高い。

体部上部はヨコ添え捩り組みで7段組まれる。タテ材を追加した部分が2カ所で確認できた。また、ヨコ材、巻き材とも材を重ねた部分を確認している。縁は、タテ材に幅2mm前後のヨコ材をあて、縁巻きの際にタテ材を表面側に折り曲げ共巻きしながら、2本飛びの巻縁で仕上げている。

底部を2本組みの網代とする民俗例はよく見られる。体部下半を2本飛びの飛びござ目、上部を1本飛びのござ目とする民俗例もよく見られる。タテ材の隙間があまり開かない（あるいは開けたくない）体部下半に2本飛びを、タテ材にある程度隙間の開いてくる体部上半に1本飛びを用い、ヨコ材に無理をかけない理にかなつた組み方をしていると思われる。

体部上部にヨコ添え捩り組みを用いる民俗例は見かけないが、材を重ね、強度を得ることが目的とすれば、民俗例では縁巻きにこの機能を持たせていると思われる。民俗例のかご素材に対し弥生時代では薄く細い素材を使用するところに、このヨコ添え捩り組みの技法が関係していると思われる。同様な構成を持つかごは、県内では宝達志水町荻市遺跡からほとんど同じものが出土しているが（弥生時代後期後葉）、素材は未同定である。

おわりに 青谷上寺地遺跡出土のかごを復元されたバスケタリー作家の本間一恵氏が「弥生時代のかごを復元する」という文章の中で「（中略）強度を落とさないように、かつ継いでいるところが目立たないよう工夫する。じっと見ているとこれを編んでいた人の心持ちが時を越えてこちらに伝わってくる（中略）」と書かれている（野田ほか2005）。つくり手とつくり手の対話である。今回報告するこのかごも、国立歴史民俗博物館の篠原徹氏の言う自然知と身体知を駆使し製作されたに違いないが（篠原1998）、それを捉えた本間氏のような観察はできなかつた。

余談ではあるが、当センターが行っている体験講座用に、クラフトテープでこのかごをモチーフにしてかごを作製してみた。その際に感じたことだが、ヨコ添え捩り組みの列が、縄文時代草創期土器の隆起線文様によく似ている。縄文土器はかごをモデルに生まれてきたのではないかと想像した。佐

賀県東名遺跡から縄文時代早期の多様なかごが発見され、また網代圧痕を持つ草創期の土器がいくつかの遺跡で見つかっている。底部から緩やかに立ち上がる形態や、四角い底、肥厚する口縁部など、かごと土器の類似点は多い。縄文施紋ですら、捩り組み、縄目組みなどの斜めに走る材の様を縄文と置き換えたと考えることも可能である。ヨコ添え捩り組みをもつかごの形状がほぼ同様でも、遺跡によって素材が異なる場合があるのと同じように、粘土と植物というように素材が異なっても、土器にかごの形状や文様を表したと考えられないだろうか。（本田・佐々木）

引用・参考文献

- 大分県別府産業工芸試験所編 1991 『竹編組技術資料 基礎技術編』
川畠 誠・沢辺利明ほか 1998 『荻市遺跡』（社）石川県埋蔵文化財保存協会
佐賀市教育委員会文化財課編 2006 『東名遺跡』 国土交通省佐賀河川総合開発工事事務所・佐賀市教育委員会
佐々木由香 2006 「6-5 編組製品」下宅部遺跡調査団編『下宅部遺跡Ⅰ(1)』 東京都都市整備局西部住宅建設事務所・東京都東村山市遺跡調査会
篠原 徹 1998 「民俗の技術とはなにか」『民俗の技術』 朝倉書店
杉山寿栄男 1942 『日本原始繊維工芸史 原始編』 雄山閣
名久井文明 2004 「民俗的古式技法の存在とその意味」『国立歴史民俗博物館研究報告』第117集 国立歴史民俗博物館
野田真弓・本間一恵ほか 2005 「第5章 青谷上寺地遺跡出土のかご」『青谷上寺地遺跡出土品調査報告書1 木製容器・かご』鳥取県埋蔵文化財センター

5. おわりに

調査開始前から多量の木製品の出土が予想されており、大型の琴（第2図1）や船部材や桶などが纏まって出土した（写真1～3）。その中でも文様を持つ筒形容器や水銀朱塗りの盾・鉄剣の柄などの北陸地方では貴重な木製品があり、また装飾付き花弁高杯や容器の脚などは青谷上寺地遺跡で製作された可能性が高い木製品もある。調査終了以降に、工楽普通・高垣陽子氏、笠原潔氏、山田昌久氏、野田真弓・本間一恵氏、出土木器研究会などの多くの方々から資料調査の際に多くのご教示を得たことで、重要な木製品が多いことが明らかとなった。そのことから早期に資料化を計るべきと判断し、高杯の資料提示と問題提起を石川ゆずは氏にお願いした。今回、中川・笠原氏により北陸地方の琴の独自性と特徴を明らかにしていただき、本田・佐々木氏にはかごの編み方と素材の紹介をお願いした。今回は筆者も一文を書く予定だったが、時間と力量の関係で無理であった。4氏に感謝して終わりとしたい。（久田）